



国際委員会だより

【第19回】

Message from International committee

実践的海外プロジェクト⑥ ～現地の人との関係づくり～

国際委員会

矢部 義夫 | YABE Yoshio

建設コンサルタンツ協会の「海外市場対応能力の支援」の一環として、国際委員会から海外業務を紹介する記事を継続して掲載しています。当初4回シリーズの予定でしたが、テーマや地域を変えて延伸することになり、第6回目をお届けいたします。

インタビュー対象者プロフィール

対象者：森 友愛 (Yume MORI) (31歳)
所属：八千代エンジニアリング株式会社
国際事業本部 都市環境部
専門分野：廃棄物計画
経験年数：海外3年
海外業務実施国：マレーシア(協力隊)
インドネシア、ベトナム

インタビュー内容

- Q1. 森さんの職歴などをお話し下さい。
- A1. 私は高専専攻科(高専の5年間の学科卒業後の2年制の専攻課程)を卒業後、JICAの青年海外協力隊の環境教育隊員として、マレーシアに派遣され、現地の廃棄物減量化のための3R(Reduce, Reuse, Recycle)推進、リサイクル活動のモニタリングに携わってきました。その後3年間JICA中国所属の国際協力推進員を務め、2013年4月より建設コンサルタントに就職し、海外業務専門の部署で主に廃棄物管理案件の調査業務等に携わっています。
- Q2. 海外コンサルタント業務をやりたいと思ったきっかけは何でしたか？

- A2. 小学生の頃から環境分野の国際協力を将来の仕事として希望しており、そのために協力隊へも関心を持ちました。一方で学生時代に自分が実際にどの立場から関わりたいのかが見えず、それを見極めるために卒業直後に協力隊へ参加しました。派遣先のマレーシアでJICA、現地コンサルタント、他ドナー、省庁関係者、NGO等様々な立場の方に関わる中で日本の技術と現地の橋渡しをする役割を担いたいと考え、建設コンサルタントを目指すことを決めました。また、派遣が決まった任地で現在務めている会社が直前に固形廃棄物減量化の計画調査を実施しており、その報告書を目にしたことも大きなきっかけとなりました。
- Q3. 現在コンサルタント会社で携わっている業務についてご説明ください。
- A3. 2013年10月からインドネシア国での「3R及び廃棄物適正管理能力の開発支援プロジェクト」(JICA技プロ)に、また同年6月からベトナム国での「固形廃棄物処理事業協力準備調査(焼却発電導入に係る官民連携(PPP)インフラ事業)」(JICA)に携わっています。前者は3R活動と廃棄物管理に係る省令案の策定や、対象都市(南スマトラ州パレンバン市及び東カリマンタン州バリクパパン市)における中期削減計画の策定の中で、3Rのパイロット事業の実施を行うことにより、対象都市において適正な3R活動と廃棄物管理を実施することを目的としています。一方、後者はベトナム国における産業廃棄物処理事業に日本の焼却発電技術を導入し、それを民間投資事業として実施可能であるかを検討し、最適な事業スキームを提案することを目的としております。



写真1 インドネシアでの現地調査の様子

写真2 マレーシアの地方の伝統的な結婚式

- Q4. 前述の業務に携わる上で何が重要だとお考えですか？
- A4. インドネシア国でのプロジェクトは官民連携案件であり、国内ではJICA及び地方自治体(北九州市)、現地では中央政府の環境省及び公共事業省、対象となる地方の2都市のそれぞれの自治体という複数のカウンターパート機関が存在するため、法制度及び削減計画の策定にあたり、関係者間での緊密な調整と連携が必要となります。同様にベトナム国案件でも民間企業の海外進出に際し現地行政と日本の民間企業の橋渡しとなる調整を行うことが求められております。半年以上両方の業務に携わる中で、プロジェクトが円滑に実施されるために、異なる関係者間の認識や方針のギャップを埋め、調整を行っていく事の重要性を学ばせて頂いています。
- Q5. 現地の関係者との調整及び関係づくりについても少し詳しくお聞かせ下さい。
- A5. 海外で業務を行う際に、まず直面するのが日本と異なる習慣や文化の違いではないでしょうか。私にとって初めての海外経験となったマレーシアで、まずぶつかったのもこの壁でした。これは失敗談ですが、協力隊として職場の市役所に赴任した直後、日本と異なりのおんびりとした仕事の姿勢に戸惑っていました。何より週に2、3日しか職場に出勤してこず、たまに来てもほとんど仕事をしようとしないうるカウンターパートに悩まされ、一方で彼女にどう働きかけるべきか、うまくコミュニケーションが取れずにいました。やがて見かねた当時の上司が、業務に熱心な他の職員と彼女の担当を入れ替えたのですが、これがトラブルになりました。突然の配置換えを上司が何も説明しなかった結果、上司と話す機会が多かった私が彼女に

疑われてしまいました。最終的には役場の多くの職員がかばってくれた事で事態は収まりましたが、これが海外での仕事のやり方を見直す事になりました。日本人の感覚からすれば効率が悪く見えても、現地では円滑に業務を行うために必要な方法だということもあり、簡単にお

かしいと決めつけるべきものではないと、ようやく気が付いたのです。それ以降、現地のやり方に合わせる業務の仕方を心がけるようになりました。また結婚式や宗教関連のお祭りなど、地域のイベントにも積極的に参加(写真)し、プライベートでも出来るだけ壁を作らないようにしました。結果的にこの時に学んだ異なる文化や習慣への接し方が、現在の業務に役立つことになり、今はあの時の失敗は必要な失敗だった、と思えるようになりました。

Q6. 女性ならではの経験などあればご紹介ください。

A6. 前項と重なりますが、宗教上女性に対していくつか制約(という用語弊があるかもしれませんが)のあるイスラム教徒の方々に関わる際に、女性だから、という事を体感することはあります。偶然かもしれませんが、男性の関係者がいる前ではあまりはっきり発言しなかった女性関係者が、後から個別に「実はね…」と意見を伝えてきた時には、こちらが女性だったからかな、と感じました。また、これは今後の課題ですが、家庭での取り組みがスタートとなる3Rの実践において、多くの場合そのメインプレイヤーである主婦を初めとした女性社会に入っていくという取り組み方も出来るのではないかと考えています。

後記

森友愛さんが海外で業務を行う際に、「異なる習慣や文化の違いとその接し方」を実際の失敗から学んだことが現在の業務に役立っているという指摘は新鮮でした。またアラブ世界の家庭では主婦のステータスが高いので、女性社会に入っていく3Rのような取り組みには女性の役割が大事という指摘も十分に納得させられました。